

# ESSAY

## ロシア旅行記

磨伊正義

金沢大学がん研究所長

3年前から日露医学医療交流財団（中山太郎理事長）の事業プロジェクトの一環として、数回にわたりロシアの極東とシベリア、そしてモスクワを訪問する機会に恵まれた。目的は、ロシアに内視鏡研修トレーニングセンターの設立が企画され、専門家による視察団の一員として参加したのがはじまりである。ウラジオストック、ハバロフスクそして東シベリアのクラスノヤルスクである。

その後日露国際シンポジウム出席のためイルクーツク、そして昨年秋はモスクワを訪問した。はじめてのロシア訪問はウラジオストックであったが、出発前は冷戦時代のイメージが強く、緊張感が大きく、不安で一杯であったが、いざ着いてしまうとこれらの不安は一掃された。ウラジオストックは、極東最大の都市であり、昔は軍港として栄えたという。その面影は、随所にみられ、旧ソ連太平洋艦隊の司令部跡や、潜水艦が残されており、軍事戦略上の重要拠点として戦後長い間秘密のベールに包まれていた。現在は港町として緑も豊かで坂の起伏も多く、東洋のサンフランシスコともいわれている。

つぎの訪問地、クラスノヤルスクは、人口100万人のシベリアの最大都市で、19世紀には政治犯の流刑地で、かの有名なレーニンもこの地に流されたという。この土地がわれわれ日本人に知られていないのは、冷戦時代に

秘密兵器などの多くの国防関連の工場や核の保有地であったため、秘密都市として地図に載っていなかったためである。昨年11月、橋本首相がクラスノヤルスク市郊外でエリツィン大統領と会談したのをご記憶の方も多いと思う。実際この土地に行ってみると莫大な緑の丘陵地や近代的な建物が林立し、冷戦時代の秘密都市のイメージはない。

2回目の訪ソは一昨年のイルクーツク市訪問である。目的は日露医学シンポジウム参加であったが、東京大学の武藤徹一郎教授に特別講演をお願いし、日本から各大学に医学部長クラスの方々を含め100名をこす参加を得た。最大の楽しみはシンポジウム終了後のバイカル湖へのピクニックであった。この湖は琵琶湖の約50倍、世界でもっとも深い湖で、透明度は高く、シベリアの真珠と謳われるゆえんであり、ロシアの医師とバーベキューを楽しんだ。

ところで、日露医学医療財団の企画した内視鏡研修トレーニングセンターは、中山太郎理事長をはじめ関係者の努力で、平成8年11月にクラスノヤルスク医科大学、ウラジオストック医科大学の2か所に完成した。日本側から供与した多くの最新式の内視鏡機器が備えられ、ロシア人医師の研修の場となっていることは嬉ばしい。

さて、1991年ソビエト連邦が解体し、ロシ

アが大きく変わろうとしている。一時期、物資不足、急激なインフレを起こし、大混乱をきたした。事実、3年前に訪れたウラジオストック市内のスーパーマーケットを覗いても食料品は少なく、これで大丈夫なのだろうか、人ごとながら案じていた。その後ロシア政府は、外資系を導入し、政府のインフレ抑制策が効を奏し、ようやく落ち着きを取りもどしつつある。

現在のモスクワ市内は2、3年前にはみられなかった外国製品の大きな看板、ネオンサインが立ち並び、もちろんスーパーの商品は豊富であった。冷戦前には想像もつかなかったであろう西欧的近代都市へと変貌を遂げつつあることを実感した。

昨年秋のモスクワ訪問の目的は、ロシア癌センターでのシンポジウムでの講演であったが、やはり大きな関心は観光である。モスクワの10月という、もう寒い時節であり、また紅葉のきれいな時期でもあった。なかでもモスクワ大学の紅葉は見事であった。スターリン様式建築の最高峰で、学生数が32,000人、卒業すればロシア社会のエリートである。受験戦争はし烈を極めるという。

限られた滞在であったため多くは回れなかったが、城塞クレムリン、赤の広場、ポリショイ劇場、ポリショイサーカスといくつか楽しんで帰国した。個人的にはバレエよりはサーカスのほうがエキサイティングであった。生バンドをバックに世界最高といわれる曲芸、道化師、空中ブランコ、スケートなど、3時間があつという間に過ぎ、われわれを魅了した。

モスクワでもう一つ有名なものに地下鉄が

ある。改札をくぐると長い長いエスカレーターに乗るが、これが地下120~150メートルへともぐることになる。このエスカレーターは速度が速く、まるで奈落の底へ落ちるような感じで、まず驚かされる。そしてもう一つ驚くことは地下鉄のプラットホームの壁は全面大理石で、天井にはシャンデリア、モザイクの絵、彫刻など、まるで地下宮殿である。意図的に何回も地下鉄を乗り換えたが、驚くことに地下鉄の駅ごとに異なった設計であり、乗り換えが楽しみであった。これらの地下鉄は、冷戦時代フルシチョフが建設したもので、戦争になれば防空壕になる。いわゆるシェルター役も果たしていたわけである。

肝心の医療事情にふれるスペースがなくなってしまったが、今のロシアの重点施策は、経済回復であり、医療費に注ぎ込む予算がなく、医師の給料も半年近く遅延しているという。医者から他の職業へ転職する人が後を絶たないというのも事実である。これまでの極東、シベリアそして今回のモスクワの病院へ訪問したが、共通していることは医療への政府の投資が非常に貧弱であることを実感している。ロシア人の平均寿命が60歳に満たないといわれ、これも医療の貧困さが原因の一つであることは否めない。しかし、ロシアは、大自然が多く、野山の木々もきれいであり、自然の宝庫である。現在も経済破綻による物資不足とインフレで市民は苦しい生活を余儀なくされているものの、街行く人々は明るさを感じられた。特に若い白系ロシアの女性は、どうしてこんなにきれいなのだろうか、今でもこの謎は解けない。